

◆ 観光振興シンポジウム ◆

鎌倉の魅力再発見 ～世界遺産登録をめざして～（要旨）

国際都市鎌倉は、世界遺産登録をめざしていますが、外国の方々から見るとどのような魅力と課題があるのでしょうか。2月27日、市内在住の外国人から意見を聞くシンポジウムが、鎌倉市観光振興推進本部主催、推進協議会共催、鎌倉市観光協会企画・立案で、満席の妙本寺本堂で開かれました。以下はその要旨です。

◎講演「鎌倉の魅力」

講師：ピーター・ミラーさん（銅版画家・アメリカ出身）

鎌倉の環境・歴史・文化から鎌倉の魅力を話されました。鎌倉の「わび・さび」を京都と対比し、鎌倉の武家文化が各地に広まったり、禅の文化が庭園に見られることを夢窓疎石の瑞泉寺や鎌倉五山、紫陽花の明月院、竹寺の報国寺などで紹介されました。そして、鎌倉は時の流れが遅く、江ノ電が走り、海や町中の風景は自動車より自転車がふさわしく、スローライフを楽しむ環境は「生きるスペースがある」と結ばれました。

◎中国琵琶演奏

陳麗華さん（琵琶演奏家・中国出身）

長谷や大船の観音にお参りする陳さんによる「観世音菩薩」や「花まつり」の素晴らしい演奏がありました。

◎パネルディスカッション「鎌倉のもつ魅力と課題」

久能靖さん（コーディネーター・ニュースキャスター）

50年鎌倉に住んでいますが、世界遺産を目指している古都鎌倉はどうあるべきなのでしょう。鎌倉にお住まいの外国人の方にはどのように見えるのでしょうか。

アナン・ビー・メタさん（会社経営・インド出身）

24年住んでいますが、鎌倉の空気を汚さないために自動車には乗りません。鎌倉は空気がおいしいし、住んでいる極楽寺の駅に降りるとまた空気が違います。

ウィルソン・ヘザーさん（大学講師・カナダ出身）

36年住んでいます。海と山があり、東京・横浜に近く、歴史のある古い町で、京都や奈良とともに爆弾を落とされずに守られ、細い路地を生かした町づくりが行われ、カナダにはない魅力があります。

佐藤ステファニア・バルディさん（通訳・イタリア出身）

鎌倉には外国人の案内等で訪れていましたが、自然な感じで無理なく溶け込めるところや歴史の重さを知る良さがあり、落ち着きのない東京から鎌倉に住みたいと、極楽寺に移って15年になります。歴史や自然環境は中世の都市国家で世界遺産にもなっている故



左から、アナンさん、ヘザーさん、バルディーさん、ミンさん。妙本寺本堂にて。

郷のシエナと似ています。これからは観光客ではなく、市民として鎌倉に関わっていききたいと思います。

グエン・ゾン・ミンさん（大学院生・ベトナム出身）

鎌倉に住んで1年ですが、安心して住める街で、春は段葛の桜、夏は燃える由比ガ浜、秋は赤く染まる鎌倉山、冬は白雪の富士山と、鎌倉の住人の心の温かさに包まれて生活が楽しいです。ハノイは千年の歴史があり、鎌倉の八百年より古いですが、心の中の存在が重要で、鎌倉も「シビック・プライド」という、住んでいる人、学んでいる人、遊びに来る人などが誇りと愛着を持てるような街に育ててほしいと思います。

◎鎌倉の気になるところ

久能さん 住む前のイメージと違うところや直したいところはどんなところですか。

アナンさん 20年で変わったのは鎌倉駅前、バスやタクシーの排気ガスをなくし電気自動車を主にして、空気をもっと良くしてほしいと思います。木が多くて噴水があるような場所にしたいです。極楽寺は信号のないところが気に入っています。

ヘザーさん 鎌倉は歴史のある古い街だと思っていたのですが、大きな屋敷が無くなると小さな西洋式の家になってしまいます。個人の家にも市が力を入れて市全体に歴史的デザインを取り入れてほしいです。

バルディさん 鎌倉に住んで山に囲まれた安心感と海の開放感が良かったのですが、開発が激しいのが気になります。環境に合うかどうか考えて、街全体の調和を住民が自覚することが必要です。

ミンさん 子供連れの若い人が住めるような魅力ある街にする企画が欲しいですね。

参加者との討論では、世界遺産に向けての交通対策や、海・山の景観の保護、母国の世界遺産と鎌倉の候補地の良さや問題点など多彩な議論が交わされ、私たちが気付かない鎌倉の魅力と課題がいろいろあることが分かりました。



平成21年度春季講座第4回講演要旨

法華堂と大倉幕府跡

講師：鎌倉市教育委員会・史跡永福寺跡調査研究委員 福田 誠さん

とき：平成21年6月20日(土) ところ：鎌倉生涯学習センター第5集会室

源頼朝と北条義時の法華堂・大倉幕府の実態はどのようなものであったのか、文献や遺跡の発掘調査によって確認できたことを話すことにしたい。

◎法華堂の変遷

末法の世に入った平安中期から、極楽往生をとげる方法として、墓所を法華堂として営むことが行われるようになった。例えば平泉の中尊寺金色堂も藤原三代の遺骸を納める法華堂である。

頼朝は生前、御所の後山に持仏堂(観音堂)を営んだが、没後それが法華堂となった。頼朝の法華堂から尾根を隔てた東側、山の中腹に義時の法華堂があった。頼朝が没した正治元年(1199)から25年後の元仁元年(1224)に死去した義時が葬られた場所である。ところが以後たびたび火災にあっている。寛喜3年(1231)10月、両法華堂は本尊と共に焼失。同年11月には頼朝法華堂の上棟式が行われたが、義時の法華堂もほどなく再建されたと思われる。宝治元年(1247)6月には、泰村以下三浦一族が頼朝法華堂に立てこもり、頼朝の御影の前で自刃するという事件があった。弘安3年(1280)10月、頼朝ならびに義時・時房の法華堂が焼失、次いで延慶3年(1310)11月に安養院から発した大火によって、法華堂などの建物多数が焼失した。

◎義時法華堂の規模

発掘調査は、平成17年4月から8月末まで行われた。国の史跡としての法華堂の範囲を広く捉えようという意識のもとに、義時法華堂跡が調査された。遺跡からは基壇と縁の礎石の一部、雨落ち溝の石列などが発見され、一辺8.4mの正方形、9尺-10尺-9尺の柱間を持つ三間堂が確認された。軒出を含めた堂の大きさは、東辺雨落ち溝と西辺雨落ち溝の距離から12.4m(41尺)であることが確認された。溝から出土した遺物は13世紀から14世紀初めのもので、弘安3年と延慶3年の火災を記した記録に一致する。

なお、その後法華堂は営まれなくなり、都市整備が進む中で、平地の少ない鎌倉の府内で墓所を営むことが禁止され、それに代わって岩窟寺院の形態を取り込んだ「やぐら」が作られるようになった。

◎武家政権発祥の地としての鎌倉

治承4年(1180)12月に頼朝の大倉御所が完成した。

当初、扇ガ谷の寿福寺のあたりにあったとされる義朝の楯(館)に置こうとしたが、義朝を祀る堂もあって手狭であったことから、大倉の地に定めたという。嘉禄元年(1225)に宇津(都)宮辻子に幕府が移転するまでの45年間、大倉は鎌倉の中心であった。御所には寝殿・対屋・御厩や侍所などの幕府の施設があり、御家人たちの館が御所を中心に東側に広がっていたことが文献や発掘調査などで判明している。

御所の南側には八幡宮脇から十二所・朝夷奈切通を経て六浦に通じる六浦路、大倉の辻付近からは永福寺へ続く二階堂大路が造られていた。三代に亘る源氏将軍の時代の鎌倉は、大倉御所と鶴岡八幡宮を中心とした東西ラインが基本軸であった。

大倉幕府を中心とする地域内で、現在まで行われた発掘調査は30件にのぼる。鎌倉時代草創期から前期までの六浦路沿いの遺跡からは、規模の大きな建物跡や側溝・建物の間を区切る薬研堀の溝や掘立柱跡が発見され、大量の遺物も出土している。二階堂大路沿いの遺跡からは、側溝・築地塀などが発見された。寺社以外の建物は地面に直接柱を建てる掘立柱建物であるため、耐用年数が短く、何度も繰り返して立て替えられている。

八幡宮境内では、直会殿用地の調査時に八幡宮草創期に近い参道が、武徳殿用地の調査時に草創期の堀や宿直小屋と思われる4棟の建物跡が発見された。

◎大倉御所移転後の鎌倉

御所が若宮大路の東側の宇津(都)宮辻子に移された後、鎌倉の中心線は若宮大路となり、南北を基本軸とする都市整備が行われた。若宮大路の両側には幅3m、深さ1.5mの側溝のあったことが確認されている。

一方、大倉御所の跡地は聖地として保存されることなく、御家人たちの館や民家などの用地として分割利用されていた。嘉禎元年(1235)法華堂前の湯屋から出火した際、湯屋と法華堂との間の民家数十軒を壊し法華堂への延焼を食い止め、宝治元年に火災になった法華堂前の人家10軒の中に金沢実時の邸宅があったことが『吾妻鏡』に記されている。

現在、西御門・東御門・南御門という地名があり、それこそが大倉幕府の記憶を明瞭に留めているもので、あらためて地名の大切さがわかる。